

独立行政法人国立国語研究所「病院の言葉」委員会 第6回実務委員会
議事要旨

1. 日時 平成20年7月25日(水) 14:30~17:30
2. 場所 国立国語研究所大会議室
3. 出席者 杉戸委員長, 有森委員, 柴田委員, 関根委員, 中山委員, 矢吹委員,
吉山委員, 徳重委員, 相澤委員, 吉岡委員, 田中委員
4. 会議の概要

(1) 第5回「病院の言葉」委員会実務委員会の記録の確認

- ・第5回実務委員会の議事録と議事要旨確認した。

(2) 活動スケジュールの確認が行われ, 次のことが確認, 依頼された。

- ・中間発表は白表紙の冊子にまとめ, アンケートを添えて全国の病院へ発送する。
同時にホームページでも公開し, 同様のアンケートを実施する。
- ・本発表(最終発表)は市販本(手引)の刊行をもってそれに代えることとし, 本年度中の刊行を目指す。それとは別に中間発表に加筆修正した白表紙の冊子も作成するが, これは配布することはせず, 同じ内容をホームページ上で公開するものとする。
- ・中間発表は10月中旬に行うものとし, それに向けて委員長より実務委員に, 第一次素案に対する校閲の依頼があった。

(3) 「病院の言葉を分かりやすくする提案(中間報告)」第一次素案について

- ・作業部会から次のような第一次素案が示された。

I. 背景と目的

II. 検討の経過

III. 「病院の言葉」の類型

IV. 類型別の工夫例

類型A 日常語で言い換えを

「浸潤」「うっ血」など

類型B 正しく理解できる分かりやすい説明を

「炎症」「黄だん」など

類型C 誤解や混同の回避を

「貧血」「熱中症」など

類型D 不安の軽減を

「腫瘍」「悪性腫瘍」など

類型E 重要概念の普及を

「セカンドオピニオン」「インフォームドコンセント」など

V. 付録

- ・第一次素案の形式と内容について，議論を行った。

5. 討議における主な意見

「病院の言葉を分かりやすくする提案（中間報告）」第一次素案 について

① 「I. 背景と目的」「II. 検討と課題」「III. 「病院の言葉」の類型」について

- ・「I. 背景と目的」は，分かりやすく段階を追って書かれていてよい。この書き方で良いだろう。
- ・「I. 背景と目的」「II. 検討の経過」などで調査について触れている箇所では，注や参考資料などの形で調査の原典を示し，読者が参照できるようにしたい。
- ・IIIの表題は，「「病院の言葉」の類型」ではなく，「「病院の言葉」の問題の類型」または「「病院の言葉」の課題の類型」とするのが的確か。
- ・中間報告は活動の報告書であると同時に，3月に刊行する手引の見本という性格もある。病院に配布することを考えると，病院にとって最も関心のある「IV. 類型別の工夫例」を前に持ってきた方が良いだろう。「I. 背景と目的」の「8. 分かりやすい説明の指針」の記述をふくませれば「II. 検討の経過」は後ろに回しても良いと思う。
- ・前半に最終的な手引に収録する内容を配置することで，手引のイメージがまとまって見えてくる。中間報告，手引ともに，提案本体は前にある方が良い。また，後ろに資料をまとめても普通はあまり見ないと思うが，手引本体に関して読者が抱くであろう疑問は先取りしてFAQのようなものを用意し，巻末の資料で分かることはそこを参照させるようにすると良い。

- ・「Ⅲ. 「病院の言葉」の類型」は、「Ⅱ. 検討の経過」の「8. 問題の類型化と工夫内容の検討」の内容から始めてはどうか。調査をしたこと自体は重要なので、ふくらませて冒頭に書くことにし、Ⅲの表題を「なぜ伝わらないのか？」のようにすると関心が集まるのではないか。
- ・「Ⅱ. 検討の経過」の「6. 言葉の収集、抽出、選定の流れ」に示された、言葉の収集、抽出、選定の流れ図は目で見ても分かりやすい。これを「Ⅲ. 「病院の言葉」の類型」の冒頭に示すという手もあるか。
- ・「Ⅰ. 背景と目的」の「4. 病院の言葉の分かりにくさ」において、なぜこの活動が必要なのかを広く公平に分かってもらうためには16年に行った調査結果を示すだけでは不十分である。皆で検討し、もっと記述を増やす必要があるだろう。この活動の必要性を示せるようなインパクトのある事例が掲げられると良い。
- ・医療従事者の使っている言葉の何割がどの類型にあたるのかが、グラフなどで示していると、医療従事者の緊迫感を増すことができる。ひとつの資料として用意しても良いだろう。語彙選定時の作業台帳にある約2000語について類型化を試み、分布を図示することができないか検討したい。

②「Ⅳ. 類型別の工夫例」について

○類型E「重要概念の普及を」について

- ・類型E「重要概念の普及を」は、認知度が低くともその専門用語を概念とともに普及すべきものとあり、この言葉を知らないと思決定において不利であり患者が知っていた方がいい言葉ととらえられる。その観点からすると、E-1「新しい検査法を表す語の普及」に属する語と、E-2「信頼と安心の医療の普及」の中の「クリニカルパス」は、類型Eとして適切であるのか疑問である。類型Eは再度検討する必要がある。

◇新しい検査法を表す語についての主な意見

- ・検査法を表す言葉は、認知率の観点からは別々の類型に属してしまうものをひとまとめにして扱いたかったことと、検査を受ける際にこの言葉を知らないと思患者にとって不利であるが、機器の名称であるためほかの言葉では言い換えられないことから、現時点でこの名称で普及しつつあるものはその名称のまま理解してもらうのが良いと判断し、類型Eとした。

- ・検査法が言い換えられないのは確かであるが、ひとまとめにして扱いたいということについては、たとえば「PET」を類型Aに取り上げ「MRI」「CT」をその関連語として扱うことで解決できる。
- ・患者に「MRI」「CT」「PET」の違いをよく分かってもらうためにも原案のように表で示すのは良いと思う。しかしこれらは機器の名称であり概念ではないので、類型Eとするのは不適格であろう。
- ・医学の進歩は技術革新と伴って進んでいくものである。類型Eを「新しい技術や概念の普及を」として、検査法を表す言葉もここに含めておくのが良い。類型Eの表題に「新しい技術」を加えれば「PET」は類型Eとして扱うことができる。「MRI」「CT」は「PET」の関連語に取り上げれば良い。
- ・検査法を表す言葉に関しては「PET」を見出しに掲げ、関連語として「MRI」「CT」を扱うのが良いだろう。

◇「クリニカルパス」についての主な意見

- ・「クリニカルパス」は、標準化された優れた医療をどの病院でも行えるよう管理するために重要な概念である、という意見により、類型Eとしたものである。
- ・「クリニカルパス」は、医療従事者に対する調査結果を見る限り、重要でこれから普及していく概念であるという感触は得られなかったし、この概念を「クリニカルパス」という言葉で定着させる必要性は感じられない。
- ・「クリニカルパス」は患者には使わない言葉である。「診療計画表」「診療の流れを示したカレンダー」と言えば十分で、言葉を覚えてもらう必要はない。類型Aに持つていくのが良い。
- ・「クリニカルパス」は、概念自体は重要であるが、類型Eとすべきかどうかは難しいところである。
- ・確かに「クリニカルパス」という言葉が普及し、患者が「パス」「パス」と言えるようになると、いろいろなことがスムーズに進むようになるだろう。「QOL」「セカンドオピニオン」などは是非理解し使ってもらいたい言葉であるので、自身は診療で積極的に患者に概念を伝えるようにしている。これらの言葉を患者が使うということは患者が自分で自分の体を守る姿勢の表れであり、実現したら素晴らしい。それを先取りして提案するという意味で、この類型Eは重要である。
- ・「クリニカルパス」という言葉がなくても、診療スケジュールそのものを見れば理解できる。言葉を同時に覚える必要はないだろう。「pathway」を「パス」として覚えさせるというのは「pass」との混乱もあり無理があると考える。
- ・「入院診療計画表（クリニカルパス）」のように示すのが良いか。確かに「クリニカルパス」は、患者に使わない医療従事者同士の言葉である。そのもの自体は重要であるので、外来語ではなく分かりやすい言葉で示した方が良いのではないか。

- ・既に大きな病院などでは、看護師たちが積極的に「パス」という言葉を患者に使っているようである。「診療スケジュール表」よりも「パス」の方がなじみやすい向きもあるのか、「パス」という言葉が現場でかなり使われているのは間違いないだろう。ただしこの言葉を、類型E-2「信頼と安心の医療の普及」に入れるべきかどうかは分からない。別のところに回しても良いかもしれない。
 - ・「クリニカルパス」は、これまでの議論で、医療従事者の委員からこの言葉を使うことが大事であるという強い意見があったものだが、患者側からすると言い換えてほしい言葉だろうとも思う。類型Aは医療従事者側が歩み寄る、類型Eは患者が歩み寄るという違いがあり、提案において類型Eを立てて患者側からの努力を促すということをどのように位置づけるかが問題である。
 - ・「クリニカルパス」は、なぜそれが重要かを示した上で、取り上げる方向で考えたい。
- ・類型AからDは比較的古い言葉で難しい言葉、もしくは病名などであるが、類型Eは、それ以外の現在変化しているところを対象にし、新しく入ってくる語の扱いを検討している点でほかとは異なる。表題を「重要な新概念の普及を」とすると、それが独り歩きし、そのまま使ってよいというお墨付きを与えた言葉のようにとられかねず、危険である。言い換えられるのであれば言い換えるのが望ましいのであり、「新概念を表す言葉」程度にとどめるのが妥当なのではないか。類型Eを立てたもともとのねらいやこの類型の特性を、もう少し詳しく記述しておく必要がある。
 - ・類型Eについて、重要かどうかの判断を客観的なデータによって示すことは不可能であり、委員会の議論を踏まえて判断していくしかないだろうと考える。類型Eは、検査法も含め、これからの医療にとって重要で患者が知らないと困る言葉を取り上げ、意味概念とともにその言葉を知ってもらうための工夫をする、という方針で、これまで合意が得られていたように思う。しかし本日の議論を受けて、再度検討する必要があると感じている。
 - ・類型Eの枠組み自体は重要であるので残したい。「クリニカルパス」のように委員会で見解の分かれる言葉を外し、異論のない言葉だけを掲げることも考えられる。
 - ・類型Eでは、「インフォームドコンセント」も扱いが難しい。「インフォームドコンセント」については、国語研究所が既に「外来語言い換え提案」で「納得診療」という言い換えを提案しているが、「納得診療」はあまり使われていない。このことをどう評価し、今回どのような提案をするのかは、重要な問題である。
 - ・特に専門用語においては、その語を積極的に使うポジティブユーザーの意見で言葉が決まっていく側面がある。「納得診療」が定着しない理由のひとつに、「外来語言い換え提案」

がポジティブユーザーに働きかけられなかったということがあるだろう。検査法については医療機器メーカーが、「クリニカルパス」については医療管理者が、その語のポジティブユーザーである。彼らにきちんと問題提起することが、類型Eの重要課題であると考えられる。

- ・ 類型Eの「重要な新概念の普及を」という表題は、医療者側に患者の理解のための工夫を求めたメッセージである。その点では他の類型と統一が取れており、このままの表現で良い。ただしE-1以下の小見出しの表現はもう少し検討すべきであろう。
- ・ 類型Eについては、見出しと[言い換え, 説明]の間に、患者にとってなぜこの言葉が大切であるのかを示す形式としてはどうか。類型A～Dとは形式を変えた方が良い。

○各類型の末尾に掲載されている、言葉のリストについて

- ・ ここでは、「医療従事者は分かっているが患者は実は分かっていない言葉」ということが示せれば良い。その言葉の定義などは重要ではないので、あまり書き込まない方が良いのではないか。
- ・ 各語の関連語のところには、調査から得られた誤解例などを盛り込み患者に説明する際の工夫などを書いた。このような情報がここでも示せると良いと思う。その言葉の正しい定義を書くのではなく、誤解の実態をかいつまんで書くと良い。
- ・ 「糜爛」に対する「ただれ」、「浮腫」に対する「むくみ」など、医療従事者側がつい使ってしまうような言葉で簡単な言い換えがあるものは、それを示してあると良い。難しい病気などをていねいに説明しても、その中で「糜爛」「浮腫」などと言ってしまうのでは元も子もない。説明に使う言葉にも配慮が必要なことに気づいてもらうためにも、ここで示すことは重要である。誤解例を示す語群とは、別立てにして示すのが良い。

以上